



Red Hat Insights 1-latest

FedRAMP に準拠した Red Hat Insights のクライアント設定ガイド

Insights クライアントの設定オプションおよびユースケース

Red Hat Insights 1-latest FedRAMP に準拠した Red Hat Insights のクライアント設定ガイド

Insights クライアントの設定オプションおよびユースケース

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

このガイドは、FedRAMP[®] に準拠した形で、RHEL システムで Insights クライアント機能を設定したい Insights for Red Hat Enterprise Linux ユーザーを対象としています。システム上の Insights クライアント設定は、Insights for Red Hat Enterprise Linux との対話に影響します。Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージをご覧ください。

目次

第1章 INSIGHTS クライアントの概要	4
1.1. RED HAT INSIGHTS クライアントディストリビューション	4
第2章 INSIGHTS-CLIENT のインストール	5
2.1. RED HAT UPDATE INFRASTRUCTURE によって管理される既存のシステムへの INSIGHTS-CLIENT のインストール	5
2.2. INSIGHTS クライアント CLI と設定ファイルの対話方法	5
2.3. RHEL の最小インストールでの INSIGHTS クライアントのインストール	6
2.4. INSIGHTS クライアント/リアルタイムスケジューリングの問題を解決する方法	6
第3章 認証の設定	7
3.1. 認証方法	7
3.2. 認証でのアクティベーションキーの使用	7
3.3. RED HAT ホスト型サービスへのシステムの登録	8
第4章 INSIGHTS-CLIENT の設定	9
4.1. RED HAT INSIGHTS へのシステムの登録	9
4.2. INSIGHTS でのシステムの登録解除	10
4.3. RED HAT INSIGHTS へのシステムの再登録	10
4.4. ホスト表示名の変更	11
4.5. クライアントバージョンの表示	12
第5章 INSIGHTS クライアントデータの難読化	13
5.1. IPV4 アドレスの難読化	13
5.2. ホスト名の難読化	14
第6章 INSIGHTS クライアントデータリダクション	16
6.1. INSIGHTS クライアントのデータリダクションオプション	16
6.2. REMOVE.CONF を使用してデータのリダクションを行う	16
6.3. リダクションに YAML ファイルの使用	21
6.4. INSIGHTS クライアントアーカイブの確認	23
第7章 システムのフィルタリングとグループ	26
7.1. SAP ワークロード	26
7.2. SATELLITE ホストグループ	26
7.3. システムタグ付けのカスタム	26
7.4. 定義済みのシステムタグを使用した RED HAT INSIGHTS ADVISOR サービスの推奨事項の精度とセキュリティの向上	29
第8章 INSIGHTS-CLIENT スケジュールの変更	33
8.1. INSIGHTS クライアントスケジュールの無効化	33
8.2. INSIGHTS クライアントスケジュールの有効化	35
8.3. INSIGHTS クライアントスケジュールの変更	37
第9章 INSIGHTS の自動ルール更新の有効化および無効化	39
9.1. INSIGHTS の自動ルール更新の無効化	39
9.2. INSIGHTS の自動ルール更新を有効にする	39
第10章 サポート用の診断ログの作成	41
10.1. 診断ログの作成	41
付録A INSIGHTS-CLIENT のコマンドオプション	42
A.1. INSIGHTS クライアントのオプション	42
付録B リダクション設定ファイルのオプション	46

B.1. INSIGHTS クライアントのリダクションファイルのオプション	46
付録C リダクション設定 YAML ファイルのオプション	48
C.1. INSIGHTS クライアント設定ファイルのオプション	48
C.2. リダクション設定 YAML ファイルのオプション	48
付録D INSIGHTS-CLIENT のコマンドオプション	51
D.1. INSIGHTS クライアント設定ファイルのオプション	51
RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)	53

第1章 INSIGHTS クライアントの概要

Insights クライアント (**insights-client**) は、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux のクライアントです。コマンドラインから **insights-client** を実行します。

1.1. RED HAT INSIGHTS クライアントディストリビューション

Insights クライアントは、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) の次のリリースで利用できます。

RHEL リリース	コメント
RHEL 9	Insights クライアントで配布される。
RHEL 8	RHEL 8 が最小インストールとしてインストールされていない限り、Insights クライアントがプリインストールされた状態で配布されます。
RHEL 7	Insights クライアント RPM パッケージはロードされていますが、インストールされていない状態で配布されます。
RHEL 6.10 以降	Insights クライアントの RPM パッケージをダウンロードし、インストールする必要があります。

関連情報

- [Getting Started with Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux](#)

第2章 INSIGHTS-CLIENT のインストール

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux は、Red Hat インフラストラクチャーによって管理されている既存のシステムにインストールすることも、Red Hat Enterprise Linux の最小インストールにインストールすることもできます。

Insights クライアントをインストールしたら、システムを登録する必要があります。システムの登録の詳細は、[認証の設定](#) を参照してください。

2.1. RED HAT UPDATE INFRASTRUCTURE によって管理される既存のシステムへの INSIGHTS-CLIENT のインストール

これらの手順を使用して、Red Hat Update Infrastructure (RHUI) が管理するクラウドマーケットプレイスで購入した既存の Red Hat Enterprise Linux システムに Insights for Red Hat Enterprise Linux をデプロイします。

前提条件

- システムのルートレベルのアクセス。

手順

- 以下のコマンドを実行し、現在のバージョンの insights クライアントパッケージをインストールします。
RHEL バージョン 6 および 7

```
[root@server ~]# yum install insights-client
```

RHEL バージョン 8 以降

```
[root@server ~]# dnf install insights-client
```

2.2. INSIGHTS クライアント CLI と設定ファイルの対話方法

Insights クライアントは、スケジューラーの設定に従って自動的に実行されます。デフォルトでは、24 時間ごとに実行されます。クライアントをインタラクティブに実行するには、**insights-client** コマンドを入力します。

クライアントが実行すると、次の値と設定によってその動作が制御されます。

1. CLI から **insights-client** を実行するときに指定する値は、事前設定された構成ファイルの設定とシステム環境の設定を一時的にオーバーライドします。**insights-client** コマンドのオプションに指定した値は、Insights クライアントのそのインスタンスに対してのみ使用されます。
2. 構成ファイル (**/etc/insights-client/insights-client.conf** および **/etc/insights-client/remove.conf**) の設定は、システム環境設定を上書きします。
3. CLI またはクライアント設定ファイルの影響を受けないシステム環境変数 (**printenv**) の値。



注記

RHEL 6.9 以前を使用している場合は、クライアントのコマンドは **redhat-access-insights** です。

2.3. RHEL の最小インストールでの INSIGHTS クライアントのインストール

Insights クライアントは、Red Hat Enterprise Linux 8 の最小インストールを実行しているシステムに自動的にインストールされません。

最小インストールの詳細は、[標準的な RHEL インストールの実行のソフトウェア選択の設定](#) を参照してください。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. Insights クライアントで最小インストールを作成するには、Anaconda インストーラーの RHEL ソフトウェア選択オプションから **Minimal Installation** を選択します。
2. **Additional Software for Selected Environment** セクションで **Standard** チェックボックスを必ず選択してください。Standard オプションには、RHEL インストールに **insights-client** パッケージが含まれています。

Standard チェックボックスを選択しない場合、RHEL は **insights-client** パッケージなしでインストールされます。その場合は、後で **dnf install** を使用して Insights クライアントをインストールできます。

2.4. INSIGHTS クライアント/リアルタイムスケジューリングの問題を解決する方法

Insights クライアントは、システム上のデータを収集する多数のコマンドを実行します。そのため、CPU 使用率を 30% 以下に制限する設定制限があります。この制限は、設定ファイルで定義します。

insights-client-boot.service: CPUQuota=30%

この設定により、Insights クライアントがシステムで CPU が急増しないようにします。CPU が急増すると、システムで実行している他のアプリケーションに干渉する可能性があります。具体的には、リアルタイムスケジューリングに依存するアプリケーションが起動しない場合があります。

リアルタイムスケジューリングを有効にする必要がある場合は、CPU クォータの制限を無効にできません。この設定を削除するリスクは最小限です。ただし、Insights クライアントの実行時に CPU 使用率が異常に高くなる可能性があります。この状況が発生し、システムの他のサービスに悪影響を与える場合は、Red Hat サポートにお問い合わせください。

第3章 認証の設定



重要

Basic 認証は非推奨になりました。Basic 認証を使用している場合は、現在サポートされている認証方法のいずれかに変更する必要があります。ユーザーアクセスのための Basic 認証から証明書ベースの認証への変更に関する詳細は、[How to switch from Basic Auth to Certificate Authentication for Red Hat Insights](#) を参照してください。

3.1. 認証方法

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux の使用方法に応じて、以下のいずれかの認証方法を使用する必要があります。

- 証明書ベースの認証 (CERT)
証明書ベースの認証は、デフォルトの認証方法です。証明書は、Red Hat Subscription Manager (RHSM) にシステムを登録するか、Red Hat Satellite のシステム管理でシステムを管理すると、生成されます。クライアント設定ファイルには、デフォルトで **authmethod=CERT** が含まれています。追加の設定変更は必要ありません。
- アクティベーションキー
推奨される認証方法では、アクティベーションキーと組織 ID を使用して、RHSM やリモートホスト設定 (RHC) などの Red Hat ホスト型サービスにシステムを登録します。

組織のアクティベーションキーは、Red Hat Hybrid Cloud Console の Activation Keys ページにリスト表示されています。アクティベーションキーを認証トークンとして使用して、システムを Red Hat Subscription Manager (RHSM) やリモートホスト設定 (RHC) などの Red Hat ホスト型サービスに登録できます。管理者は、組織のアクティベーションキーを作成、編集、および削除できます。

関連情報

- [Red Hat Hybrid Cloud Console でのアクティベーションキーの作成と管理](#)
- [Red Hat Hybrid Cloud Console のアクティベーションキーのスタートガイド](#)
- [How to switch from Basic Auth to Certificate Authentication for Red Hat Insights](#)
- [Red Hat Hybrid Cloud Console API の Basic 認証からサービスアカウントによるトークンベース認証への移行](#)
- [サービスアカウントの作成と管理](#)

3.2. 認証でのアクティベーションキーの使用

アクティベーションキーは、許可されたユーザーがシステムを登録および設定できるようにする事前共有認証トークンです。個人のユーザー名とパスワードの組み合わせを保存、使用、共有する必要がなくなるため、セキュリティが向上し、自動化が促進されます。

アクティベーションキーと数値の組織識別子 (組織 ID) を使用して、Red Hat Subscription Manager (RHSM) やリモートホスト設定 (rhc) などの Red Hat ホスト型サービスにシステムを登録できます。組織のアクティベーションキーと組織 ID は、Hybrid Cloud Console の Activation Keys ページに表示されます。

システムのアクティベーションキーを作成および管理する方法の詳細は、[Red Hat Hybrid Cloud Console](#) での [アクティベーションキーの作成と管理](#) を参照してください。

3.3. RED HAT ホスト型サービスへのシステムの登録

Insights クライアントをインストールしたら、システムを登録する必要があります。これには、次の 2 つの手順が必要です。

- Red Hat Subscription Manager (RHSM) やリモートホスト設定 (rhc) などの Red Hat ホスト型サービスへの登録
- Insights クライアントへのシステムの登録

Insights クライアントへのシステムの登録の詳細は、[Insights クライアントの設定](#) を参照してください。

前提条件

- 各システムへの管理者ログインアクセス
- アクティベーションキー
- 組織 ID

手順

RHEL 7 および 8

1. Red Hat Enterprise Linux バージョン 7 または 8 を実行するシステムを登録するには、アクティベーションキーと組織 ID を使用して RHSM に登録します。

```
# subscription-manager register --activationkey=_activation_key_name_ --  
org=_organization_ID_
```

RHEL 9

1. RHEL 9 以降を実行するシステムを登録するには、アクティベーションキーを使用して rhc クライアントに登録します。システムで rhc 管理サービスを実行しない場合は、RHEL 7 または RHEL 8 の場合と同じコマンドを RHEL 9 システムに対して使用します。

```
# rhc connect --activation-key example_key --organization
```

関連情報

- Insights のインストールの詳細は、[Red Hat Insights の使用](#) を参照してください。
- rhc クライアントの詳細は、[リモートホストの設定および管理](#) を参照してください。
- [Red Hat Hybrid Cloud Console のアクティベーションキーのスタートガイド](#)
- [Red Hat Hybrid Cloud Console でのアクティベーションキーの作成と管理](#)
- [RHEL システム登録のスタートガイド](#)
- Insights クライアントへのシステムの登録の詳細は、[Insights クライアントの設定](#) を参照してください。

第4章 INSIGHTS-CLIENT の設定

Insights クライアントをインストールして認証を設定した後、システムを Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に登録する必要があります。登録すると、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux サービスを使用できるようになります。

オプションで、システムを登録する際に、ホストに表示名を割り当てることができます。表示名により、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux UI でシステムが識別されます。システムの登録時に表示名を割り当てないと、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux は **/etc/hostname** のデフォルト値を使用します。

4.1. RED HAT INSIGHTS へのシステムの登録

Insights クライアントをインストールして認証を設定したら、システムを Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に登録する必要があります。登録すると、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux サービスを使用できるようになります。

オプションで、システムを登録する際に、ホストに表示名を割り当てることができます。表示名は、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux UI でシステムを識別します。システムの登録時に表示名を割り当てないと、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux は **/etc/hostname** のデフォルト値を使用します。

前提条件

- システムのルートレベルのアクセス許可。
- Insights クライアントがシステムにインストールされている。

手順

1. **--register** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --register
```

2. **オプション**: システムの表示名を指定するには、**--display-name** オプションを含めます。以下に例を示します。

```
[root@insights]# insights-client --register --display-name ITC-4
System display name changed from None to ITC-4
```

検証

- **--status** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --status
System is registered locally via .registered file. Registered at 2019-08-20T12:56:48.356814
Insights API confirms registration.
```

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にアクセスできるようになりました。

関連情報

- [Red Hat Cloud Access が管理する既存の RHEL システムに Red Hat Insights をデプロイする](#)

- [Red Hat Update Infrastructure](#) が管理する既存の RHEL システムに Red Hat Insights をデプロイする
- [Red Hat Hybrid Cloud Console](#) でのアクティベーションキーの作成と管理

4.2. INSIGHTS でのシステムの登録解除

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux を使用して、システムの登録を取り消すことができます。これを行うと、システム情報は Insights for Red Hat Enterprise Linux にアップロードされなくなります。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。
- システムは Insights for Red Hat Enterprise Linux に登録されています。

手順

1. **--unregister** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --unregister
Successfully unregistered from the Red Hat Insights Service
```

検証

- **--status** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --status
System is NOT registered locally via .registered file. Unregistered at 2021-03-12T10:36:39.257300
Insights API says this machine was unregistered at 2021-03-12T00:36:39.000Z
```

4.3. RED HAT INSIGHTS へのシステムの再登録



注記

--force-reregister オプションは非推奨です。**insights-client** コマンドで **--force-reregister** オプションを実行すると、次のエラーメッセージが表示されます。

```
[root@insights]# ERROR: `force-reregistration` has been deprecated. Please use `insights-client --unregister && insights-client --register` instead
```

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にシステムを再登録し、再登録後に Insights インベントリーサービスでホストエントリーが重複しないようにするには、次の 2 つのオプションを使用して、**insights-client** コマンドを 2 回実行します。

1. **--unregister**
2. **--register**

前提条件

- システムのルートレベルのアクセス許可。
- Insights クライアントがシステムにインストールされている。

手順

1. **--unregister** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --unregister
```

2. **--register** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --register
```

検証

insights-client コマンドで **—register** オプションを指定した後に、**insights-client** コマンドで **—unregister** オプションを指定して再登録コマンドを実行すると、以下のメッセージが表示されます。

```
[root@insights]# Successfully uploaded report for <machine name>
View the Red Hat Insights console at https://console.openshiftusgov.com/insights/
```

4.4. ホスト表示名の変更

GUI に表示されるホスト表示名を変更できます。Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にシステムの登録時、または登録後に、この変更を加えます。システムの登録時に表示名を割り当てないと、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux は **/etc/hostname** の値を使用します。

この手順はオプションです。デフォルトの **hostname** に加えて表示名を使用するかどうかを決定します。



注記

insights-client コマンドを使用して表示名を設定すると、すぐに適用されますが、Insights クライアントは実行されません。



注記

ホスト名を難読化すると、**/etc/hostname** で設定した **hostname** が難読化されます。**hostname** が難読化されている場合でもホストを識別できるように、**表示名** を割り当てます。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

- **--display-name** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、表示名を指定します。

```
[root@insights]# insights-client --display-name ITC-4
System display name changed from None to ITC-4
```

- スペースを含む表示名を作成するには、二重引用符を使用します。

```
[root@insights]# insights-client --display-name "ITC-4 B9 4th floor"  
System display name changed from None to ITC-4 B9 4th floor
```

4.5. クライアントバージョンの表示

クライアントバージョンとクライアントのコアバージョンを表示できます。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

- **--version** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --version  
Client: 3.0.6-0  
Core: 3.0.121-1
```

関連情報

- [Red Hat Insights クライアントコアの変更ログ](#)
- [Changelog ファイル](#)

第5章 INSIGHTS クライアントデータの難読化

Insights クライアントは、IP アドレスとホスト名の両方を難読化します。難読化では、Python SoS プロセスを使用して、Insights クライアントアーカイブを処理するときに、ホスト名と IP アドレスを事前設定された値に置き換えます。処理されたアーカイブファイルは、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信されます。

`/etc/insights-client/insights-client.conf` 設定ファイルで難読化を有効または無効にできます。システム IP アドレスを難読化するか、IP アドレスとホスト名の両方を難読化するかを選択できます。ホスト名だけの難読化は選択できません。



注記

難読化の値を選択することはできません。Python SoS プロセスによって値が自動的に選択されます。



注記

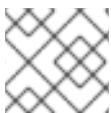
Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux コンプライアンスサービスは、OpenSCAP ツールを使用して、ホストシステムからの情報に基づいてコンプライアンスレポートを生成します。OpenSCAP とのコラボレーションにより、コンプライアンスサービスがホスト名および IP アドレスのデータを完全に難読化または編集する機能が妨げられます。また、コンプライアンスデータ収集ジョブがホストシステムで起動されると、ホスト情報が Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信されます。Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux は、ホスト情報の難読化オプションの改善に取り組んでいます。

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux がデータ収集を処理する方法については、[Red Hat Insights Data & Application Security](#) を参照してください。

5.1. IPV4 アドレスの難読化

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信前に、アーカイブファイルの IPv4 ホストアドレスを難読化できます。

IP アドレスの難読化を選択すると、アーカイブファイルのホストアドレスは Python SoS ファイルで指定の値に変更されます。難読化のために提供される値を設定することはできません。また、難読化するホスト IP アドレスの一部をマスクまたは選択することもできません。



注記

IP アドレスの難読化は、IPv4 アドレスにのみサポートされています。

手順

1. エディターで `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを開きます。
2. 次の設定を含む行を見つけます。

```
#obfuscate=False
```

3. `#` を削除し、**False** を **True** に変更します。

```
obfuscate=True
```

4. `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを保存して閉じます。

例

- 元のホスト IP アドレス

```
192.168.0.24
```

- Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux での表示時の難読化されたホストの IP アドレス

```
10.230.230.1
```

別のシステムで IP アドレスの難読化を選択すると場合、Python SoS プロセスは、自身の IP アドレスを、アーカイブファイル内の同じ難読化された値に変更します。この例では、追加のシステムも難読化された IP アドレス **10.230.230.1** を示しています。Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux GUI では、難読化の結果として、IP アドレスが同じシステムが複数表示される場合があります。

5.2. ホスト名の難読化

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信前に、アーカイブファイルのホスト名を難読化できます。システムにホスト名が1つ割り当てられている場合には、`/etc/hostname` の **hostname** は **host0** に変わります。追加のホスト名は **host1**、**host2** のように、システムに設定されたホスト名の数まで、名前が切り替わります。

難読化されていない表示名をシステムに割り当てることができます。表示名は、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーションに表示されます。`/etc/hostname` のみが難読化されていません。



注記

ホスト名を難読化したい場合は、IP アドレスも難読化する必要があります。

前提条件

- IP アドレスを難読化しました。詳細は、[IPv4 アドレスの難読化](#) を参照してください。

手順

1. エディターで `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを開きます。
2. `obfuscate_hostname` が含まれる行を見つけます。

```
#obfuscate_hostname=False
```

3. `#` を削除し、**False** を **True** に変更します。

```
obfuscate_hostname=True
```

4. `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを保存して閉じます。
5. (必要に応じて)、`insights-client` コマンドに `--display-name` オプションを指定して使用し、システムの表示名を割り当てます。表示名は難読化されていません。

```
[root@insights]# insights-client --display-name ITC-4
```

ホスト名の難読化を選択すると、アーカイブファイルの **/etc/hostname** の値が Python SoS ファイルに指定されている値に変更されます。難読化されたホスト名は、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に表示されます。

例

- 元の **/etc/hostname**

```
RTP.data.center.01
```

- Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux で表示される、難読化された **/etc/hostname**

```
host0
```



注記

別のシステムでホスト名が難読化するように設定すると、その名前は同じ難読値を使用します。Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux GUI では、難読化の結果として、**hostname** が同じシステムが複数表示される場合があります。

関連情報

- [IPv4 アドレスの難読化](#)
- [Python SoS ワークフローシステム \(外部リンク\)](#)

第6章 INSIGHTS クライアントデータリダクション

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux は、個人を特定できる情報 (PII) を含む可能性のあるデータを含め、最小限のデータを収集します。PII (またはその他の設定データ) が収集されないようにするには、データ編集を適用します。

6.1. INSIGHTS クライアントのデータリダクションオプション

Insights クライアントは、データリダクションオプションを提供します。RHEL のバージョンによっては、データリダクションを制御する方法が2つあります。

表6.1 データリダクションおよび RHEL のバージョン

RHEL バージョン	リダクションの方法
RHEL 6.9、7.8、8.2 以前	設定ファイル remove.conf
RHEL 6.10、7.9、8.3 以降	YAML ファイル file-redaction.yaml file-content-redaction.yaml



注記

remove.conf 設定ファイルまたは YAML ファイルを作成する必要があります。デフォルトではインストールされていません。

関連情報

- Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux がデータ収集を処理する方法については、[Red Hat Insights Data & Application Security](#) を参照してください。

6.2. REMOVE.CONF を使用してデータのリダクションを行う

データリダクションに設定ファイルを使用する場合は、ファイルの内容によって、リダクションされるデータとその方法が制御されます。デフォルトの設定ファイルは `/etc/insights-client/remove.conf` です。オプションとして、別のリダクション設定ファイルを使用するように Insights クライアントを設定することもできます。

リダクション設定ファイルのエントリーに基づいて、以下のアクションを1つ以上指定できます。

- データが収集されないように特定のファイルとそのコレクションを取り除く
- データ収集から選択したコマンド出力を取り除く
- パターンと一致する情報を取り除く
- 特定の文字列をデフォルトの **keyword** 文字列に置き換える

内容を取り除いてリダクションを設定した場合、リダクションされた情報はアーカイブファイルには記録されません。リダクションは、アーカイブファイルでデータをキャプチャーする前に、データを事前処理して実行します。

文字列置換によるリダクションの場合には、アーカイブファイルは、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信される前に、Python SoS プロセスが処理します。



注記

remove.conf ファイルは、正規表現の一致をサポートしていません。

コマンドラインオプションを使用して、アーカイブファイルの出力を制御できます。たとえば、アーカイブファイルを生成できますが、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信できません。アーカイブを送信する前に、リダクション結果を調べて確認できます。



注記

ファイルとコマンド出力を編集すると、その情報を Insights for Red Hat Enterprise Linux ルールと比較するために使用できなくなります。これらの省略により、Insights for Red Hat Enterprise Linux がシステムに適用される問題を特定できない場合があります。

6.2.1. remove.conf を使用した Insights データリダクションの設定

/etc/insights-client/remove.conf ファイルは、Insights クライアントデータのリダクションを制御します。このファイルは手動で作成する必要があります。

Red Hat Enterprise Linux 6.9、7.8、8.2、およびそれ以前を実行している場合は、このリダクション方法を使用します。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. エディターを使用して **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルテンプレートを作成します。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$secret,ultra$secret+
```

2. **オプション**: Insights クライアントのリダクションに適用しないファイル内の行をすべて削除します。
3. ファイルを保存して、エディターを終了します。
4. コマンドラインを使用して、**remove.conf** ファイルのアクセス許可が **root** 所有者のみに設定されていることを確認します。

```
[root@insights]# ll remove.conf
-rw-----. 1 root root 145 Sep 25 17:39 remove.conf
```

6.2.2. 特定のファイルコンテンツのリダクション

remove.conf ファイルを使用して、リダクションを行う特定のファイルを選択できます。選択ファイルとその内容は、アーカイブファイルには追加されません。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルが存在する必要があります。**remove.conf** ファイルをまだ作成していない場合は、作成します。
- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルをエディターで開きます。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **files=** の行で、アーカイブファイルからリダクションするファイルを追加または削除します。



注記

各ファイル名はコンマで区切り、空白は使用しないでください。

3. **オプション:** Insights クライアントアーカイブからファイルのリダクションを行いたくない場合は、**files=** 行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

6.2.3. 特定コマンドのリダクション

remove.conf ファイルを使用して、特定のコマンドにリダクションを行うことができます。リダクションを行ったコマンドの出力は、アーカイブファイルに含まれません。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルが存在する必要があります。**remove.conf** ファイルをまだ作成していない場合は、作成します。
- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルをエディターで開きます。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **commands=** 行で、リダクションを行うコマンドをアーカイブファイルから追加するか、リダクションを行わないコマンドを削除します。



注記

各コマンドは、1つのコンマで区切ります。空白は使用しないでください。

3. **オプション**: Insights クライアントアーカイブからファイルのリダクションを行いたくない場合は、**files=** 行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

6.2.4. リダクションの文字列パターン

remove.conf ファイルを使用して、アーカイブファイルから特定の文字列パターンのリダクションを行うことができます。

リダクションを行う文字列パターンを指定すると、アーカイブファイル内のそのパターンを含む全行のリダクションが行われます。たとえば、文字列パターンが **name** で、そのパターンが **hostname**、**filename**、**username** と一致するものをリダクションします。



注記

正規表現とワイルドカードの一致 (**egrep**) はサポート対象外です。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルが存在する必要があります。**remove.conf** ファイルをまだ作成していない場合は、作成します。
- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルをエディターで開きます。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **patterns=** の行で、アーカイブファイルからリダクションする文字列パターンを追加します。



注記

各文字列パターンを1つのコンマで区切ります。空白は使用しないでください。

3. **オプション**: アーカイブファイルからパターンのリダクションを行わない場合は、**patterns=** 行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

6.2.5. キーワードのリダクション

remove.conf ファイルを使用して、特定キーワードのリダクションが行えます。Python SoS プロセスは、選択したキーワードをアーカイブファイル内の **keyword0**、**keyword1**、**keyword2** などに置き換えます。

前提条件

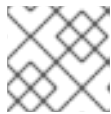
- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルが存在する必要があります。**remove.conf** ファイルをまだ作成していない場合は、作成します。
- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルをエディターで開きます。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **keywords=** の行で、アーカイブファイルからリダクションするキーワードを追加します。



注記

各文字列パターンを1つのコンマで区切ります。空白は使用しないでください。

3. **オプション:**アーカイブファイルからキーワードを削除したくない場合は、**keywords=** 行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

6.2.6. remove.conf ファイルの検証

remove.conf ファイルを検証して、リダクションに使用する前に構文が正しいことを確認してください。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルが存在する必要があります。**remove.conf** ファイルをまだ作成していない場合は、作成します。
- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **--validate** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --validate
```

2. コマンドが表示するエラーを修正します。

6.3. リダクションに YAML ファイルの使用

リダクションに YAML ファイルを使用する場合は、2つのファイルでリダクションのアクションが制御されます。

- **file-redaction.yaml**
- **file-content-redaction.yaml**

リダクションするコンテンツに合わせて、1つまたは両方のファイルを使用できます。Python SoS プロセスが実行すると、アーカイブファイルにキャプチャされる前に、指定されたコンテンツのリダクションが行われます。



注記

Red Hat Enterprise Linux 6.10、7.9、8.3 以降を実行している場合は、このリダクション方法を使用します。

YAML ファイルの仕組み

/etc/insights-client/file-redaction.yaml には、リダクションを行うコマンドとファイルの一覧が表示されます。プロセスが実行すると、リストされたコマンドとファイル出力のリダクションが行われます。

/etc/insights-client/file-content-redaction.yaml は、パターンのリダクションとキーワードの置換を定義します。パターンリダクションの場合、プロセスは、YAML ファイルで指定されたものと一致するパターンまたは正規表現をリダクションします。キーワード置換の場合、プロセスは指定されたキーワードを汎用識別子に置き換えます。

6.3.1. ファイル編集のための YAML コマンドの設定

/etc/insights-client/file-redaction.yaml ファイルには、リダクションを行うコマンドとシステムファイルが一覧表示されます。Python SoS プロセスが実行するとき、リストされたコマンドまたはファイルの出力は、アップロードされたアーカイブファイルに含まれません。

前提条件

- YAML 構文の基本を理解しているYAML の説明は、この手順の範囲外です。
- システムへのルートレベルのアクセス権が必要です。

手順

1. エディターを使用して **/etc/insights-client/file-redaction.yaml** ファイルを作成します。

例

```
# file-redaction.yaml
---
# Exclude the entire output of commands
# Specify the full command path or the symbolic name in .cache.json

commands:
- /bin/rpm -qa
- /bin/ls
- ethtool_i
```

```
# Exclude the entire output of files
# Specify the full filename path or the symbolic name in .cache.json

files:
- /etc/audit/auditd.conf
- cluster_conf
```

2. **file-redaction.yaml** ファイルのパーミッションが **root** 所有者にのみ設定されていることを確認します。

```
[root@insights]# ll file-redaction.yaml
-rw-----. 1 root root 145 Sep 25 17:39 file-redaction.yaml
```

6.3.2. YAML パターンおよびキーワードリダクションの設定

/etc/insights-client/file-content-redaction.yaml ファイルは、パターンリダクションとキーワード置換の2つの方法を使用してファイルをリダクションします。パターンリダクションは、パターンマッチまたは正規表現マッチのいずれかを使用します。キーワード置換では、Python SoS プロセスがキーワードを一般的な識別子に置き換えます。

前提条件

- YAML 構文の基本を理解しているYAML の説明は、この手順の範囲外です。
- システムへのルートレベルのアクセス権が必要です。

手順

1. エディターを使用して **/etc/insights-client/file-content-redaction.yaml** ファイルを作成します。

例

```
# file-content-redaction.yaml
---
# Pattern redaction per matching line
# Lines that match a pattern are excluded from files and command output.
# Patterns are processed in the order that they are listed.
# Example

patterns:
- "a_string_1"
- "a_string_2"

# Regular expression pattern redaction per line
# Use "regex:" to wrap patterns with regular expressions"
# Example

patterns:
  regex:
  - "abc.*def"
  - "localhost[[:digit:]]"
```

```
# Keyword replacement redaction
# Replace keywords in files and command output with generic identifiers
# Keyword does not support regex
# Example

keywords:
- "1.1.1.1"
- "My Name"
- "a_name"
```

2. **file-content-redaction.yaml** ファイルのパーミッションが **root** 所有者にのみ設定されていることを確認してください。

```
[root@insights]# ll file-content-redaction.yaml
-rw-----. 1 root root 145 Sep 25 17:39 file-content-redaction.yaml
```

6.4. INSIGHTS クライアントアーカイブの確認

アーカイブファイルの内容を確認できます。アーカイブファイルを検査して、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信されるデータを確認できます。

難読化またはリダクションを使用する場合は、送信前にアーカイブを検査できます。アーカイブファイルを保存する場合は、システムにそのまま保管できます。

6.4.1. アップロード前のアーカイブの検証

Python SoS スクリプトがアーカイブを Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にアップロードする前にアーカイブを検査するには、Insights クライアントを実行し、ファイルをアップロードせずに保存します。これにより、クライアントが Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信する情報を表示し、難読化または編集の設定を確認できます。

アーカイブファイルは `/var/tmp/` ディレクトリーに保存されます。**Insights-client** が完了すると、ファイル名が表示されます。

前提条件

- リダクションを使用する場合は、`/etc/insights-client/remove.conf` ファイルが正しく設定されていることを確認します。
- 難読化を使用する場合は、`/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルが正しく設定されていることを確認します。

手順

1. **--no-upload** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --no-upload
```

このコマンドでは、リダクションまたは難読化の適用時に、情報メッセージが表示されます。

```
WARNING: Excluding data from files
Starting to collect Insights data for ITC-4
WARNING: Skipping patterns found in remove.conf
```

```

WARNING: Skipping command /bin/dmesg
WARNING: Skipping command /bin/hostname
WARNING: Skipping file /etc/cluster/cluster.conf
WARNING: Skipping file /etc/hosts
Archive saved at /var/tmp/qsINM9/insights-ITC-4-20190925180232.tar.gz

```

2. **Archive saved at** メッセージのように、一時ストレージディレクトリーに移動します。

```
[root@insights]# cd /var/tmp/qsINM9/
```

3. 圧縮された **tar.gz** ファイルをデプロイメントします。

```
[root@insights]# tar -xzf insights-ITC-4-20190925180232.tar.gz
```

スクリプトは、ファイルを含む新しいディレクトリーを作成します。

6.4.2. アップロード後の Insights クライアントアーカイブの検証

Python SoS スクリプトがアーカイブを Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にアップロードした後、検査のためにアーカイブのコピーを保持するには、**insights-client** を実行してファイルを保存します。これにより、クライアントが Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信する情報を確認し、難読化または編集の設定を確認できます。

前提条件

- リダクションを使用する場合は、**/etc/insights-client/remove.conf** ファイルが正しく設定されていることを確認します。
- 難読化を使用する場合は、**/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルが正しく設定されていることを確認します。

手順

1. **--keep-archive** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --keep-archive
```

このコマンドでは、情報メッセージが表示されます。

```

Starting to collect Insights data for ITC-4
Uploading Insights data.
Successfully uploaded report from ITC-4 to account 6229994.
Insights archive retained in /var/tmp/ozM8bY/insights-ITC-4-20190925181622.tar.gz

```

2. **Insights archive retained in** メッセージで表示されるように、一時ストレージディレクトリーに移動します。

```
[root@insights]# cd /var/tmp/ozM8bY/
```

3. 圧縮された **tar.gz** ファイルをデプロイメントします。

```
[root@insights]# tar -xzf insights-ITC-4-20190925181622.tar.gz
```

スクリプトは、ファイルを含む新しいディレクトリーを作成します。

第7章 システムのフィルタリングとグループ

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux を使用すると、個々のサービスだけでなく、インベントリーでシステムをフィルタリングできます。Insights for Red Hat Enterprise Linux では、次の3つの基準でシステムのグループをフィルタリングすることもできます。

- SAP ワークロードを実行するグループ
- Satellite ホストグループ
- YAML ファイルで定義するカスタムフィルター



注記

2022年春の時点で、インベントリー、アドバイザー、コンプライアンス、脆弱性、パッチ、ドリフト、およびポリシーで、グループとタグによるフィルタリングが有効になります。その他のサービスは後から続きます。

グローバルの **Filter Results** ボックスを使用して、SAP ワークロード、Satellite ホストグループ、または Insights クライアント設定に追加されたカスタムフィルター、および Insights クライアント設定ファイルに追加されたファイルフィルター別にフィルタリングします。

前提条件

- Insights クライアントが各システムにインストールされている。
- システムのルートレベルのアクセス許可。

7.1. SAP ワークロード

2025年にLinuxはSAP ERPワークロードの必須オペレーティングシステムになるため、Red Hat Enterprise Linux および Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux では、Insights for RHEL が SAP 管理者に選ばれる管理ツールとなるように取り組んでいます。

この継続的な取り組みの一環として、Insights for Red Hat Enterprise Linux は、管理者によるカスタマイズを必要とせずに、SAP ワークロードを実行しているシステムに SAP ID (SID) によって自動的にタグを付けます。Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーション全体でこれらのワークロードをフィルター処理するには、グローバルの **Filter Results** ドロップダウンメニューを使用します。

7.2. SATELLITE ホストグループ

Satellite ホストグループは Satellite で設定され、Insights for Red Hat Enterprise Linux で自動的に認識されます。

7.3. システムタグ付けのカスタム

システムにカスタムのグループ化とタグ付けを適用できます。これにより、コンテキストマーカを個々のシステムに追加したり、Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーションでこれらのタグでフィルター処理したり、関連するシステムに簡単に注目したりできます。この機能は、何百または何千ものシステムが管理されている環境で、Red Hat Enterprise Linux の Insights を大規模にデプロイメントする場合に特に価値があります。

複数の Insights for Red Hat Enterprise Linux サービスにカスタムタグを追加する機能に加えて、定義済みタグを追加できます。advisor サービスは、これらのタグを使用して、より高いレベルのセキュリティを必要とするシステムなど、より注意が必要なシステムに的を絞った推奨事項を作成できます。

7.3.1. フィルター構造

フィルターは、`namespace=value` または `key=value` のペア構造を使用します。

- **名前空間。** 名前空間は、取り込みポイントの名前である `Insights-client` です。この値は変更できませんこの `tags.yaml` ファイルは名前空間から抽象化され、アップロード前にクライアントによってインジェクトされます。
- **キー。** キーを作成するか、システムから事前定義されたキーを使用できます。大文字、文字、数字、記号、および空白文字の組み合わせを使用できます。
- **値。** 独自の説明的な文字列値を定義できます。大文字、文字、数字、記号、および空白文字の組み合わせを使用できます。

7.3.2. カスタムグループおよび `tags.yaml` ファイルの作成

タグを作成して `/etc/insights-client/tags.yaml` に追加するには、`insights-client` を `--group=<name-you-choose>` オプションとともに使用します。このコマンドオプションは、次のアクションを実行します。

- `etc/insights-client/tags.yaml` ファイルを作成します。
- `group=` キーおよび `<name-you-choose>` の値を `tags.yaml` に追加します。
- システムから Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーションに新規アーカイブをアップロードすることで、最新の結果とともに新しいタグがすぐに表示されます。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. 次のコマンドを root として実行し、`<name-you-choose>` の代わりにカスタムグループ名を追加します。

```
[root@server ~]# insights-client --group=<name-you-choose>
```

2. **オプション:** タグを追加するには、`/etc/insights-client/tags.yaml` ファイルを編集します。
3. [Inventory > Systems](#) に移動し、必要に応じてログインします。
4. **Filter by tags** ドロップダウンメニューをクリックします。検索ボックスを使用してタグ名のすべてまたは一部を入力すると、タグ内にそのテキストが含まれるシステムが自動的に表示されます。
5. リストを下にスクロールしてタグを見つけます。
6. タグをクリックしてフィルター処理を行います。
7. システムが、アドバイザーシステムリストの結果に含まれていることを確認します。

- a. [Inventory > Systems](#) に移動し、必要に応じてログインします。
- b. **Name** フィルターをアクティブにし、システムが表示されるまでシステム名を入力してから選択します。
- c. タグの記号は濃い色で、その横の数字は実際に適用されたタグの数を示します。

7.3.3. タグの追加または変更を行うための `tags.yaml` の編集

group タグを作成したら、`tags.yaml` の内容を編集して、タグを追加または変更できます。

以下の手順では、`/etc/insights-client/tags.yaml` ファイルを編集し、[Red Hat Insights > RHEL > Inventory](#) にタグが存在することを確認する方法を説明します。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. タグ設定ファイル `tags.yaml` をエディターで開きます。

```
[root@server ~]# vim /etc/insights-client/tags.yaml
```

2. ファイルの内容を編集するか、**key=value** ペアを追加します。必要に応じて、追加の **key=value** ペアを追加します。大文字、文字、数字、記号、および空白文字の組み合わせを使用します。以下の例は、システムに複数のタグを追加するときに `tags.yaml` を整理する方法を示しています。

```
# tags
---
group: _group-name-value_
location: _location-name-value_
description:
- RHEL8
- SAP
key 4: value
```

3. 変更を保存してエディターを閉じます。
4. Insights for Red Hat Enterprise Linux へのアップロードを生成します。

```
[root@server ~]# insights-client
```

5. [Inventory > Systems](#) に移動し、必要に応じてログインします。
6. **Filter Results** ボックスで、下矢印をクリックし、フィルターの1つを選択するか、フィルターの名前を入力して選択します。



注記

タグキーまたはその値で検索できます。

7. 結果でシステムを検索します。

8. フィルターアイコンが禁止され、システムに適用されるフィルターの数を示す数字が表示されることを確認します。

7.4. 定義済みのシステムタグを使用した RED HAT INSIGHTS ADVISOR サービスの推奨事項の精度とセキュリティーの向上

Red Hat Insights advisor サービスの推奨事項は、すべてのシステムを同等に扱います。ただし、システムによっては、他のシステムよりも高いレベルのセキュリティーが必要な場合や、異なるネットワークパフォーマンスレベルが必要な場合があります。カスタムタグを追加する機能に加えて、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux は定義済みタグを提供します。advisor サービスはこれを使用して、より注意が必要な可能性のあるシステムに的を絞った推奨事項を作成できます。

定義済みタグによって提供される拡張されたセキュリティー強化と強化された検出および修復機能をオプトインして取得するには、タグを設定する必要があります。設定後、advisor サービスは、調整された重大度レベルと、システムに適用されるネットワークパフォーマンス設定に基づいて推奨事項を提供します。

タグを設定するには、`/etc/insights-client/tags.yaml` ファイルを使用して、インベントリサービスでシステムにタグを付ける場合と同様の方法で、定義済みタグを使用してシステムにタグを付けます。定義済みタグは、カスタムタグの作成に使用されるのと同じ **key=value** 構造を使用して設定されます。Red Hat の定義済みタグの詳細を次の表に示します。

表7.1 サポートされている定義済みタグのリスト

キー	値	注記
security	normal (デフォルト) / strict	default を使用すると、advisor サービスは、システムのリスクプロファイル、RHEL の最新バージョンのデフォルト設定および頻繁に使用される使用パターンから導出されたベースラインと比較します。これにより、推奨事項の焦点があっており、アクション可能で、数を減らすことができます。 strict 値を使用すると、advisor サービスはセキュリティーが重要なシステムであると見なし、特定の推奨事項でより厳密なベースラインが使用されるようになり、新しい最新の RHEL インストールでも推奨事項が表示される可能性があります。
network_performance	null (デフォルト) / latency / throughput	ネットワークパフォーマンス設定 (ビジネス要件に応じたレイテンシーまたはスループット) は、システムに対する advisor サービスの推奨事項の重大度に影響しません。



注記

定義済みタグのキー名は予約されています。定義済みの値とは異なる値を持つキー **security** をすでに使用している場合、推奨事項に変更は加えられません。既存の **key=value** がいずれかの定義済みのキーと同じ場合にのみ、推奨事項に変更が加えられます。たとえば、**key=value** が **security: high** の場合、Red Hat の定義済みタグが原因で、推奨事項は変更されません。**key=value** ペアが **security: strict** である場合は、システムの推奨事項に変更が加えられます。

関連情報

- [システムタグを使用して、拡張セキュリティー強化の推奨事項を有効にする](#)
- [タグを活用して Red Hat Insights Advisor の推奨機能の環境認識を向上させる](#)
- [システムタグ付けのカスタム](#)

7.4.1. 定義済みタグの設定

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux advisor サービスの定義済みタグを使用すると、システムの推奨事項の動作を調整し、拡張されたセキュリティー強化と強化された検出および修復機能を得ることができます。以下の手順に従って、事前定義されたタグを設定できます。

前提条件

- システムへの root レベルのアクセスがある。
- Insights クライアントがインストールされている。
- Insights クライアント内にシステムが登録されている。
- すでに **tags.yaml** ファイルを作成している。[tags.yaml ファイルの作成とカスタムグループの追加](#) を参照してください。

手順

1. コマンドラインと任意のエディターを使用して、**/etc/insights-client/tags.yaml** を開きます。(次の例では Vim を使用しています。)

```
[root@server ~]# vi /etc/insights-client/tags.yaml
```

2. **/etc/insights-client/tags.yaml** ファイルを編集して、タグの定義済みの **key=value** ペアを追加します。この例は、**security: strict** および **network_performance: latency** タグを追加する方法を示しています。

```
# cat /etc/insights-client/tags.yaml
group: redhat
location: Brisbane/Australia
description:
- RHEL8
- SAP
security: strict
network_performance: latency
```

3. 変更を保存します。

4. エディターを終了します。
5. **オプション: Insights-client** コマンドを実行して、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux へのアップロードを生成するか、次のスケジュールされた Red Hat Insights アップロードまで待ちます。

```
[root@server ~]# insights-client
```

定義済みタグが実稼働環境にあることの確認

Red Hat Insights へのアップロードを生成した後 (または、次の Insights アップロードのスケジュールを待った後)、[Red Hat Insights > RHEL > Inventory](#) にアクセスして、タグが実稼働環境にあるかどうかを確認できます。システムを見つけて、新たに作成されたタグを探します。次のことを示す表が表示されます。

- 名前
- 値
- タグソース (例: insights-client)。

次のイメージは、タグを作成した後にインベントリーに表示される内容の例を示しています。

Name	Value	Tag source
group	redhat	insights-client
location	Brisbane/Australia	insights-client
security	strict	insights-client
description	RHEL8	insights-client
description	SAP	insights-client
network_performance	latency	insights-client

定義済みタグを適用した後の推奨事項の例

次の図では、advisor サービスは **network_performance: latency** タグが設定されたシステムを示しています。

Name	Modified	Category	Total risk	Risk of change	System	Remediation
NICs on Azure VMs encounter high network latency issue due to a known issue in the NETVSC driver	24 days ago	Performance	Important	Moderate	1	Playbook
NICs on Azure VMs encounter network performance issue due to a known issue in the NETVSC driver	2 years ago	Performance	Moderate	Moderate	1	Playbook

システムは、総リスク (重要に分類) が高い推奨事項を表示します。 **network_performance: latency** タグのないシステムの場合、総リスクは中程度に分類されます。総リスクの高さに基づいて、システムの優先順位付けに関する決定を行うことができます。

第8章 INSIGHTS-CLIENT スケジュールの変更

Insights クライアントを実行するタイミングを制御するスケジュールを無効化、有効化、および変更できます。デフォルトでは、Insights クライアントは 24 時間ごとに実行します。全システムが同時にクライアントを実行しないように、デフォルトのタイマーのスケジューリングは異なります。

8.1. INSIGHTS クライアントスケジュールの無効化

デフォルトの Insights クライアント設定を変更して新しいスケジュールを作成する前に、クライアントスケジュールを無効にする必要があります。

Insights-client スケジュールを無効にするために使用する手順は、Red Hat Enterprise Linux とクライアントのバージョンによって異なります。

関連情報

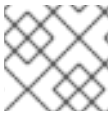
- [カスタムスケジュールの作成に関する KCS の記事](#)
- [cron に関する KCS の記事](#)

8.1.1. Client 1.x を使用する RHEL 7.4 以前でのクライアントスケジュールの無効化



注記

Client 1.x はサポート対象外になりました。



注記

--no-schedule オプションは、クライアント 3.x 以降で非推奨になりました。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **--version** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントのバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

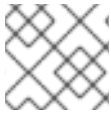
2. **--no-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを無効にします。このコマンドは、**/etc/cron.daily** のシンボリックリンクを削除します。

```
[root@insights]# insights-client --no-schedule
```

3. エディターで **/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルを開き、以下の行を追加します。

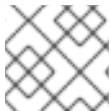
```
no_schedule=True
```

8.1.2. Insights クライアント 1.x を使用した RHEL 7.5 以降のクライアントスケジュールの無効化



注記

Insights クライアント 1.x はサポートされなくなりました。



注記

--no-schedule オプションは、Insights クライアント 3.x 以降では非推奨です。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

- version** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントのバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

- no-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを無効にします。

```
[root@insights]# insights-client --no-schedule
```

8.1.3. クライアント 3.x を使用した RHEL 6、RHEL 7 以降のクライアントスケジュールの無効化



注記

Client 1.x はサポート対象外になりました。



注記

--no-schedule オプションは、クライアント 3.x 以降で非推奨になりました。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

- version** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントのバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 3.0.6-0
Core: 3.0.121-1
```

2. **--disable-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを無効にします。

```
[root@insights]# insights-client --disable-schedule
```

8.2. INSIGHTS クライアントスケジュールの有効化

クライアントスケジュールを最初に有効にすると、デフォルトの設定を使用して実行します。スケジュールを変更すると、それらの設定が優先されます。

コマンドラインから **insights-client** を実行すると、Insights クライアントは、そのセッションに対してのみ指定した設定を使用して実行します。次にスケジュールされた実行が行われるときは、デフォルト設定が使用されます。

8.2.1. RHEL 7.4 以前および Client 1.x での Insights クライアントスケジュールの有効化

クライアントスケジュールを有効にして、デフォルト設定で実行できます。デフォルトのスケジュール設定を変更すると、変更された設定が優先されます。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。
- クライアントスケジュールが無効になっている。
- (オプション) デフォルトのスケジュールを変更している。

手順

1. クライアントのバージョンを確認するには、**insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定して入力します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

2. エディターで **/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルを開きます。以下の行をファイルに追加します。設定ファイルにすでに **no_schedule** の値がある場合は、それを **False** に変更します。

```
no_schedule=False
```

3. **--register** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントを有効にします。

```
[root@insights]# insights-client --register
```

8.2.2. RHEL 7.5 以降および Client 1.x での Insights クライアントスケジュールの有効化

クライアントスケジュールを有効にして、デフォルト設定で実行できます。デフォルトのスケジュール設定を変更すると、変更された設定が優先されます。



注記

Client 1.x はサポート対象外になりました。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。
- クライアントスケジュールが無効になっている。
- (オプション) デフォルトのスケジュールを変更している。

手順

1. クライアントのバージョンを確認するには、**insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定して入力します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

2. **--register** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを有効にします。

```
[root@insights]# insights-client --register
```

8.2.3. RHEL 7 以降および Client 3.x での Insights クライアントスケジュールの有効化

クライアントスケジュールを有効にして、デフォルト設定で実行できます。デフォルトのスケジュール設定を変更すると、変更された設定が優先されます。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。
- クライアントスケジュールが無効になっている。
- (オプション) デフォルトのスケジュールを変更している。

手順

1. クライアントのバージョンを確認するには、**insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定して入力します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 3.0.6-0
Core: 3.0.121-1
```

2. **--enable-schedule** オプションを指定して **Insights -client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを有効にします。

■


```
[root@insights]# insights-client --enable-schedule
```

8.3. INSIGHTS クライアントスケジュールの変更

Insights クライアントがいつ実行するかを変更するには、スケジュールを変更します。使用方法は、システムが実行している RHEL のリリースとクライアントのバージョンによって異なります。

RHEL のバージョンに合った手順を選択します。

- Red Hat Enterprise Linux 7.4 以前の場合は、**cron** を使用してシステムスケジュールを変更します。
- Red Hat Enterprise Linux 7.5 以降の場合は、**systemd** 設定と **Insights-client-timer** ファイルを更新します。

8.3.1. cron を使用した Insights クライアントのスケジュール設定



注記

この手順は、Client バージョン 1.x を使用して RHEL 7.4 リリース以前を実行しているシステムに使用します。



注記

Client 1.x はサポート対象外になりました。

Insights-client を実行するためのデフォルトスケジュールを変更するには、システム **cron** ファイルを更新します。

Red Hat Enterprise Linux では、**/etc/crontab** ファイルは定期的に複数のサブディレクトリーでスクリプトを自動的に実行します。

```
/etc/cron.hourly
/etc/cron.daily
/etc/cron.weekly
/etc/cron.monthly
```

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。
- Insights クライアントのスケジュールが無効になっています。

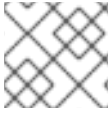
手順

1. スケジュールを選択し、**cron** をセットアップして、**insights-client** を実行します。
2. 変更が完了したら、**insights-client** スケジュールを有効にします。

関連情報

- **cron** の依存関係について理解するには **crontab(1)** および **cron(8)** の man ページを参照してください。
- [cron およびその使用方法](#)

8.3.2. systemd 設定を使用した insights-client のスケジューリング



注記

Client 3.x で RHEL 7.5 以降を実行しているシステムにこれを使用します。

システムの **systemd** 設定および **insights-client.timer** ファイルを更新して、デフォルトの **insights-client** 実行スケジュールを変更できます。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **Insights-client.timer** ファイルの設定を編集するには、**systemctl edit** コマンドとファイル名を入力します。

```
[root@insights]# systemctl edit insights-client.timer
```

この動作により、デフォルトのシステムエディターで空のファイルが開きます。

2. 別の設定を入力してスケジュールを変更します。この例の値は、**systemd** のデフォルト設定です。

```
[Timer]
OnCalendar=daily
RandomizedDelaySec=14400
```

3. **insights-client** スケジュールを有効にします。

```
[root@insights]# insights-client --enable-schedule
```

関連情報

- **systemctl(1)**、**systemd.timer(5)**、および **systemd.time(7)** のマニュアルページを確認して、**systemd** を理解してください。
- [cron およびその使用方法](#)

第9章 INSIGHTS の自動ルール更新の有効化および無効化

デフォルトでは、Insights のコレクションルールの自動更新が有効になっています。クライアント設定ファイルを編集して、それらを無効にしたり、再度有効にしたりすることができます。

9.1. INSIGHTS の自動ルール更新の無効化

Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux の自動コレクションルールの更新を無効にできます。これを実行する場合は、古いルール定義ファイルを使用し、最新の検証更新を取得しないリスクがあります。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。
- 自動ルール更新が有効になっています。

手順

1. エディターで `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを開きます。
2. 以下の内容が含まれる行を見つけます。

```
#auto_update=True
```

3. `#` を削除し、`True` を `False` に変更します。

```
auto_update=False
```

4. `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを保存して閉じます。

9.2. INSIGHTS の自動ルール更新を有効にする

以前に更新を無効にしている場合は、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux のコレクションルールの自動更新を再度有効にできます。デフォルトでは、ルール自動更新は有効になっています。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。
- 自動ルール収集が無効になっています。

手順

1. エディターで `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを開きます。
2. 以下の内容が含まれる行を見つけます。

```
auto_update=False
```

3. `False` を `True` に変更します。

```
auto_update=True
```

-
- 4. `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを保存して閉じます。

第10章 サポート用の診断ログの作成

Red Hat サポートチームのサポートが必要な場合は、診断ログファイルを作成して共有できます。このログファイルは、サポートチームが **insights-client** に関する問題のトラブルシューティングを行う際に役立ちます。

10.1. 診断ログの作成

サポートチームと共有する診断ログを作成できます。

前提条件

- システムへのルートレベルのアクセス。

手順

1. **--support** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --support
```

このコマンドは、サポートファイルの作成時に情報メッセージを表示します。

```
Collecting logs...
Insights version: insights-core-3.0.121-1
Registration check:
status: True
unreachable: False
...
Copying Insights logs to archive...
Support information collected in /var/tmp/H_Y43a/insights-client-logs-20190927144011.tar.gz
```

2. メッセージで **Support information collected in** に表示されているコレクションディレクトリに移動します。

```
[root@insights]# cd /var/tmp/H_Y43a
```

3. 圧縮された **tar.gz** ファイルをデプロイメントします。

```
[root@insights]# tar -xzf insights-client-logs-20190927144011.tar.gz
```

tar.gz ファイルを解凍すると、ログファイルを含む新しいディレクトリが作成されます。依頼を受けた場合は、サポートチームと **tar.gz** ファイルを共有してください。

付録A INSIGHTS-CLIENT のコマンドオプション

root 権限を持つシステム管理者は、**insights-client** コマンドとそのオプションを使用して、システムでの Insights クライアントの操作を制御できます。**insights-client.rpm** は Insights for Red Hat Enterprise Linux の個々のコンポーネントよりも更新頻度が低いため、man ページには **insights-client** コマンド操作に関する最新情報が含まれていない可能性があります。

insights-client コマンドを入力するたびに、クライアントはデータを収集し、それを Insights for Red Hat Enterprise Linux に送信します。



注記

insights-client --display-name コマンドを使用して表示名を設定すると表示名はすぐに有効になりますが、Insights クライアントは実行されません。

A.1. INSIGHTS クライアントのオプション

表A.1 insights-client ユーザーコマンドオプション

オプション	詳細
--help -h	ヘルプ情報を表示します
--register	/etc/hostname の情報を使用して、ホストを Insights for Red Hat Enterprise Linux に登録します。 --disable-schedule が設定されていない限り、cron ジョブを毎晩、自動的に有効にします。
--unregister	Insights for Red Hat Enterprise Linux からホストを登録解除します。
--display-name=DISPLAY_NAME	GUI でホスト表示名を設定または変更します。 /etc/hostname のホスト名とは別のものを指定するには、 --register を使用して、ホストの登録時に display_name を設定します。
--group=GROUP	登録時にホストを GROUP に追加します。グループ名は /etc/insights-client/tags.yaml で定義されます。
--retry=RETRIES	アップロードを再試行する回数を設定します。デフォルトは 1 です。再試行の間隔は 180 秒で、Insights クライアントがアップロードを再試行するまで待機する時間です。 注記: スケジューラーでは、再試行回数は 3 回です。
--validate	/etc/insights-client/remove.conf ファイルの構造を検証します。

オプション	詳細
--quiet	エラーメッセージのみをコンソールに記録します。
--silent	コンソールに何もログを記録しません。
--enable-schedule	<p>ジョブスケジュールを有効にします。デフォルトでは、Insights クライアントは毎日午前 0 時ごろに実行します。</p> <p>注記: クライアント 1.x を使用している場合は、--register オプションを使用してスケジュールを有効にします。</p>
--disable-schedule	毎晩のジョブスケジュールを無効にします。
--conf=CONF -c=CONF	デフォルトの /etc/insights-client/insights-client.conf ファイルの代わりに、カスタム設定ファイル CONF を使用します。
--compressor	アーカイブの作成時に使用する圧縮を選択します。利用可能なオプションは gz 、 bz2 、 xz 、 none です。デフォルトは gz です。 none オプションは、圧縮なしで tar ファイルを作成します。
--no-upload	クライアントを実行しますが、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux または CMSfR Web アプリケーションにアーカイブをアップロードしません。アーカイブは /var/tmp/ ディレクトリーに保存されます。ファイル名は、 insights-client の処理が完了すると表示されます。
--offline	ネットワーク機能を使用せずにクライアントを実行します。 --no-upload を意味します。
--logging-file=LOGFILE	指定の LOGFILE にログデータを出力します。デフォルトのログファイルは /var/log/insights-client/insights-client.log です。
--diagnosis	API から診断情報を取得します。システムは、 --diagnosis を使用する前に、登録してアップロードする必要があります。
--compliance	OpenSCAP でシステムをスキャンし、レポートをアップロードします。
--payload=PAYLOAD	特定のアーカイブの PAYLOAD ファイルを Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にアップロードします。 --content-type が必要です。

オプション	詳細
--content-type=TYPE	PAYLOAD ファイルの content-type を設定します。タイプには gz、bz2、xz、および none を指定できます。TYPE は PAYLOAD で使用される --compressor と一致する必要があります。
--check-results	Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux から分析結果を取得します。
--show-results	--check-results が取得した分析結果を表示します。
--output-dir=DIR	コレクションは、アップロードせずに、指定したディレクトリーに書き込みます。
--output-file=FILE	コレクションを、アップロードせずに、指定したアーカイブに書き込みます。

insights-client コマンドには、操作のデバッグに便利な複数のオプションがあります。

表A.2 **insights-client** デバッグオプション

オプション	詳細
--version	insights-client クライアントおよびコアのバージョンを出力します。
--test-connection	Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux サービスへの接続をチェックします。
--force-reregister	このオプションは非推奨です。システムを再登録するには、 Red Hat Insights へのシステムの再登録 を参照してください。
--verbose	すべてのデバッグ出力をコンソールに記録します。
--no-upload	クライアントは実行しますが、アーカイブはアップロードされません。アーカイブは /var/tmp/ ディレクトリーに保存されます。ファイル名は、 insights-client の処理が完了すると表示されます。
--keep-archive	アップロード後もアーカイブを保持します。
--support	サポート用の診断ログを生成します。
--status	ホスト登録のステータスを表示します。

オプション	詳細
--net-debug	コンソールにネットワーク呼び出しのログを記録します。

付録B リダクション設定ファイルのオプション

設定ファイル `/etc/insights-client/remove.conf` は、Insights for Red Hat Enterprise Linux クライアントがデータを編集する方法を制御します。



注記

RHEL 6.10、7.9、8.3 以降では、**remove.conf** の使用が非推奨となり、YAML ファイル 2 つに置き換えられます。

Insights クライアントは、**remove.conf** の情報に基づいてアーカイブファイルでリダクションを実行します。リダクションアクティビティーの多くは、アーカイブファイルが生成され、Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux サービスに送信する前に行われます。

B.1. INSIGHTS クライアントのリダクションファイルのオプション

ファイル名および場所

リダクション設定ファイルの推奨名は、`/etc/insights-client/remove.conf` です。このファイルの作成には、root 権限が必要です。このファイルは、Insights クライアントのデプロイメントの一部として自動作成されません。



注記

`/etc/insights-client/insights-client.conf` 設定ファイルは、リダクション設定ファイルの名前と場所を指定します。

`remove.conf` のファイルテンプレート

以下は、`remove.conf` ファイルのテンプレート例です。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$secret,ultra$secret+
```

- 各入力値は、スペースなし、コンマ1つで、区切ります。
- リダクションしないデータの行は追加しないでください。
- 正規表現とワイルドカードの一致 (**egrep**) はサポート対象外です。
- すべてのエントリーは、大文字と小文字が区別されます。

表B.1 `remove.conf` 設定オプション

オプション	詳細
<code>[remove]</code>	これは、 remove.conf ファイルの最初の行に配置する必要があります。

オプション	詳細
files=	記載のファイルは、データ収集から除外されます。
commands=	ここに記載のコマンドの出力は、データ収集から除外されます。コマンド名は、 コレクションルール のコマンド名と完全一致する必要があります。
patterns=	パターン に完全一致または部分一致するアーカイブファイルの行はすべて削除されます。
keywords=	キーワードは、 keyword の実際の値と数字に置き換えられます。 たとえば、 keywords=host, domain のようにキーワードを2つ定義した場合は、 host が出現すると文字列 keyword0 に、 domain が出現すると keyword1 に置き換えられます。それ以外に定義したキーワードはそれぞれ、 keywordn (nの数字は1つずつ漸増) に置き換えられます。

付録C リダクション設定 YAML ファイルのオプション



注記

RHEL 6.10、7.9、8.3 以降では、Insights クライアントは YAML ファイルを使用してリダクションを設定します。以前のリリースでは、**remove.conf** ファイルでリダクションを制御します。

C.1. INSIGHTS クライアント設定ファイルのオプション

C.2. リダクション設定 YAML ファイルのオプション



注記

RHEL 6.10、7.9、8.3 以降では、Insights クライアントは YAML ファイルを使用してリダクションを設定します。以前のリリースでは、**remove.conf** ファイルでリダクションを制御します。

表C.1 file-redaction.yaml ファイルのリダクション例

コンテンツ	詳細
<pre># file-redaction.yaml ---</pre>	<p>ファイル名を含むコメント (任意)。</p>
<pre># Exclude the entire output of commands # Specify the full command path or the symbolic name in .cache.json commands: - /bin/rpm -qa - /bin/ls - ethtool_i</pre>	<p>/bin/rpm -qa および bin/ls からの全出力がアーカイブファイルから除外されます。</p> <p>.cache.json ファイルで /sbin/ethtool -i の全コマンドがシンボリック名 ethtool_i にマッピングされます。</p>
<pre># Exclude the entire output of files # Specify the full filename path or the symbolic name in .cache.json files: - /etc/audit/auditd.conf - cluster_conf</pre>	<p>指定されたファイルは、ファイル名とファイルの内容がアーカイブファイルから除外されます。</p> <p>.cache.json ファイルで /etc/cluster/cluster.conf の完全ファイルパスがシンボリック名 cluster_conf にマッピングされます。</p>

表C.2 file-content-redaction.yaml のコンテンツリダクションの例

コンテンツ	詳細
<pre># file-content-redaction.yaml ---</pre>	<p>ファイル名を含むコメント (任意)。</p>
<pre># Pattern redaction per matching line # Lines that match a pattern are excluded from files and command output. # Patterns are processed in the order that they are listed. # Example patterns: - "a_string_1" - "a_string_2"</pre>	<p>パターンが a_string_1 または a_string_2 を含む行に完全一致する場合には、そのパターンがコマンドの出力やファイルから除外されます。パターンの文字列を引用符で囲みます。</p>
<pre># # Regular expression pattern redaction per line # Patterns with regular expressions (regex) are wrapped with "regex:" # Example patterns: regex: - "abc.*def" - "localhost[[:digit:]]" #</pre>	<p>正規表現は regex でラップされます。egrep コマンドで認識される正規表現 (regex) を使用できます。正規表現を引用符で囲みます。</p>
<pre># Lines matching these regular expressions are excluded # from output. patterns: regex: - "*\.conf" - "^include"</pre>	<p>egrep 式は引用符で囲み、正規表現が正しく認識されるようにします。</p> <p>この例では、文字列に .conf が含まれる場合、または行が include で始まる場合に、行がアーカイブファイルからリダクションされます。</p>

コンテンツ	詳細
<pre># Replace keywords in files and command output with generic identifiers by the Python soscleaner module keywords: - "1.1.1.1" - "My Name" - "a_name"</pre>	<p>keywords: 配列の文字列は、keyword の実際の値と数字に置き換えられます。</p> <p>たとえば、1.1.1.1 の文字列は keyword0 に置き換えられます。文字列 My Name が出現するたびに、keyword1 に置き換えられます。 a_name は keyword3 に置き換えられます。他に定義したキーワードは、keywordn (n は1ずつ漸増) に置き換えられます。置き換えられた keywordn の値は、Python SoS プロセスで決定されるので変更できません。</p> <p>keywords: 配列で定義する文字列は、大文字と小文字が区別されます。</p>

付録D INSIGHTS-CLIENT のコマンドオプション

`/etc/insights-client/insights-client.conf` 設定ファイルの設定を使用して、システムでの Insights クライアントの動作を変更できます。

D.1. INSIGHTS クライアント設定ファイルのオプション

設定ファイルと CLI に同様のオプションがある場合は、**insights-client** コマンドを入力すると CLI オプションが実行されます。スケジューラーがクライアントを実行すると、設定ファイルのオプションが実行します。



注記

選択肢は、示されているとおりに正確に入力する必要があります。**True** と **False** は、最初の文字を大文字にします。

設定ファイルでオプションを有効にするには、行頭の **#** を削除し、オプションの値を指定します。変更は、次のスケジュール実行時または **insights-client** コマンドの実行時に適用されます。

表D.1 `insights-client.conf` 設定オプション

オプション	詳細
<code>[insights-client]</code>	クライアント設定ファイルに別の場所または名前を指定した場合でも、設定ファイルの最初の行が必要です。
<code>#loglevel=DEBUG</code>	ログレベルを変更します。オプション: DEBUG、INFO、WARNING、ERROR、CRITICAL デフォルトは DEBUG です。デフォルトのログファイルの場所は <code>/var/log/insights-client/insights-client.log</code> です。
<code>#auto_config=True</code>	Satellite Server で自動設定を試みます。値は True (デフォルト) または False です。  注記 auto_config=True (デフォルト) の場合には、使用する認証方法は CERT です。
<code>#authmethod=CERT</code>	認証方法を設定します。有効なオプションは CERT です。デフォルト値は CERT です。
<code>#username=</code>	認証方法が BASIC の場合に使用する ユーザー名 。ユーザー名はクリアテキストで保存されます。

オプション	詳細
#password=	認証方法が BASIC の場合に使用するパスワード。パスワードはクリアテキストで保存されません。
#base_url=cert-api.access.redhat.com:443/r/insights	API のベース URL。
#proxy=	プロキシの URL。例: http://user:pass@192.168.100.50:8080
#auto_update=True	動的設定を自動更新します。デフォルトは True です。自動的に更新しない場合は、 False に変更します。
#obfuscate=False	IPv4 アドレスを難読化します。デフォルトは False です。アドレスの難読化を有効にするには、 True に変更します。
#obfuscate_hostname=False	ホスト名を難読化します。ホスト名を難読化するには obfuscate=True と設定する必要があり、この設定で IPv4 アドレスの難読化が可能になります。ホスト名のみを難読化することはできません。
#display_name=	登録の表示名。デフォルトは /etc/hostname を使用します。注記: この値は、 insights-client --display-name コマンドと対話します。CLI を使用して表示名を変更したにも関わらず、設定ファイルで別の表示名が有効な場合は、スケジューラーが Insights クライアントを実行すると、表示名が設定ファイルの値に戻ります。
#cmd_timeout=120	コレクション中に実行するコマンドのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値に達すると、コマンドプロセスは終了します。
#http_timeout=120	HTTP 呼び出しのタイムアウト (秒単位)
#remove_file=/etc/insights-client/remove.conf	リダクションファイルの場所 Insights client may prevent processes from initializing real-time scheduling.

RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)

Red Hat ドキュメントに関するフィードバックをお寄せください。いただいたご要望に迅速に対応できるよう、できるだけ詳細にご記入ください。

前提条件

- Red Hat カスタマーポータルにログインしている。

手順

フィードバックを送信するには、以下の手順を実施します。

1. [Create Issue](#) にアクセスします。
2. **Summary** テキストボックスに、問題または機能拡張に関する説明を入力します。
3. **Description** テキストボックスに、問題または機能拡張のご要望に関する詳細を入力します。
4. **Reporter** テキストボックスに、お客様のお名前を入力します。
5. **Create** ボタンをクリックします。

これによりドキュメントに関するチケットが作成され、適切なドキュメントチームに転送されます。フィードバックの提供にご協力いただきありがとうございました。